

革命キューバの夢と現実

片山博文

革命の「筋を通す国」キューバへ

2007年2月26日から3月7日にかけて、とある平和NPO団体に随行して、初めてキューバを訪れた。キューバ訪問の日程は、初日にハバナ大学の経済分析センターを訪問し、次の日は有機農業の農場を2つ見学した。その後はシエンフエゴスを経由して世界遺産の町トリニダーに泊まり、帰りはゲバラ記念館のあるサンタ・クララを経由してリゾート地バラデロで一泊。ヘミングウェイ『老人と海』の舞台となった港町コヒーマルを経て再びハバナに戻って帰国した。8泊10日、行き帰りにトロント経由でそれぞれ1泊したので、実質6日のキューバ訪問であった。

私は学生時代からのキューバ・ファンである。「第二、第三、そして無数のベトナムを！」と言い残してボリビアに倒れたチェ・ゲバラは、私の青春時代のヒーローであった。キューバは社会主義国にありがちな官僚の腐敗がなく、徹底的な平等が貫かれている。最低限の生活が保障されていて、教育と医療に力を入れ、国民の教育費や医療費は全て無料である。自国が貧しいのに他の途上国に援助をしたり、ソ連時代の経済援助に恩義を感じて、いまだにチェルノブイリ被災児を受け入れて治療を行ったりしている。経済封鎖でアメリカにイジメられているにもかかわらず、台風カトリーナの被害の際にはアメリカに医療団の派遣を申し出た(もっともこれは、アメリカに断られたが)。また最近では、ソ

連崩壊後のエネルギー危機・経済危機の中で、石油に依存しない有機農業に国を挙げて取り組み、世界から注目されている。

私の研究対象は旧ソ連諸国の移行経済であるが、拝金主義・権力主義がまかり通っているいまのロシアには、はっきり言ってかなりうんざりしている。一方カストロ体制のキューバに対しては、革命の「筋を通す」国として、昔からいつも大きな共感を持っていた。その意味で今回の旅行は、大きな期待とともにキューバに出かけたのである。しかし、現地を見てきた率直な感想として、「革命キューバはなかなか厳しいなあ」という印象を持たざるを得なかった。

経済開放と広がる格差

確かに賃金格差は非常に小さい。平均月収はおよそ600ペソであるが、ハバナ大学で大学教授の月収を聞いたら大体1000ペソくらいだということであった。あと給料が高い職業は警官で、理由は不正防止のためだそうである。旧ソ連諸国に行くと警官にからまれることがけっこうあるのだが(私も昔ウズベキスタンで派出所まで連れて行かれて尋問を受け、結局何事もなく解放されたがかなり不快な思いをした)、なるほどキューバでそういう危険性は感じなかった。町を歩いていてもいわゆる物乞いの姿はなく、トリニダーで1回おばさんにかからまればしたけれども、それも生

活がかかっているような切羽詰った雰囲気はまるでなくて、何かくれたらコーラでも買おう、という程度の軽いノリである。

ただフラストレーションがたまったのは、われわれ外国人観光客と、現地の一般市民が隔絶されているということだ。キューバ人と話げたのは最初の大学・農場訪問だけで、後は「金持ちの先進国観光客」として、リゾート地に行ってカネをバラ撒いて来ただけだったような気もする。もちろん、それには旅行の組み方にも一因があるが、このように一般市民と隔絶されてしまう大きな原因の一つは、彼らと私たちの使うお金が違うということだ。私たち外国人は、現地のペソではなく、米ドルとほぼ等価の「兌換ペソ」を使うことが義務付けられている。1米ドルはおよそ24ペソであるから、「ペソ」は「兌換ペソ」の24分の1の価値しかないわけである。この二重通貨制度が、一般市民の生活に触れる上で大きな障害になっていると思う。

いまキューバの大きな問題の一つは、外貨にアクセスできるかどうかで、人々の収入に格差が生じていることである。近年キューバは一時期の経済危機を脱して、2005年度には11.8%という「革命始まって以来の」経済成長を達成したが、その原動力となったのが観光産業であった。いろいろな外貨収入が見込める観光産業は、キューバ人にとって花形の職業である。ペソに比べて外貨が強いために、ペソで決まった給料しかもらえない大臣や大学教授よりも、ドルでチップをもらえるドアボーイの方が多くの収入を得られるという現象も生じている。もちろん格差といってもその程度のものだから、大金持ちではなく「小金持ち」のレベルなのだが、実際、一回に1米ドルのチップでも、それが集まれ

ばキューバ人にとってかなりの額になるし、例え小額であってもそれはそれで社会の不公平感を助長する。私たちがたまたま拾ったタクシーの運転手さんも、前は大学の数学教師だったがタクシーの方がずっと実入りが多いので辞めてしまったと言っていた。

抑え付けられた消費の欲望

全般的に、平等と安定が保証されている一方で、消費の欲望を抑え付けられていることに対する人々の不満、特に若者の不満は、非常に大きいように感じられた。現在、キューバはアメリカから厳しい経済封鎖を受けており、それがキューバ経済の困難に繋がっている。基礎物資はいまだに配給制である。ガイド兼通訳のホセさん(彼は30代半ばで昔研修生として日本に1年ほど滞在したことがあり、小田原の研修所に通っていたという。キューバの情勢に詳しく日本語も堪能で、非常に有能な方であった)に「ノート」を意味する「リブレタ」と呼ばれる配給手帳を見せてもらったが、パンや油、タバコ、マッチなど十数種類の物資が配給の対象となっていた。道路や上下水道などのインフラ更新も遅れ、町には革命前からのクラシックカーやソ連製のラーダがいまだに走っていて、あちこちでヒッチハイクが行われている。

ちなみに、外国人観光客は、キューバに行くときは「ツーリストカード」の発行を受けなければならない。これは最初どのような意味があるのか分からなかったのだが、キューバに入国したあとパスポートを見ても、どこにも入国のハンコがなく、代わりにツーリストカードに押し込められている。理由を聞くと、アメリカの経済封鎖法で過去キューバに入国したことがある人は罰せられるので、

ハンコはツーリストカードに押し当てパスポートに証拠が残らないようにするためということであった。

こうしたことは経済封鎖の影響の端的な現われであろうが、しかし同時に、それにとどまらない消費の抑制が行われている。例えばキューバ人が外国から電化製品やパソコンを持ち込むことは非常に難しく(国内の電気需要をコントロールするためだという)、税関で没収されてしまうそうだ。インターネットも民間のプロバイダーはなく全て官庁プロバイダーなので、役人や大学教員、医者などを除く一般市民は、インターネットを利用することがほとんどできないのが現状である。情報の制約といえ、新聞(党機関紙)やTVでも、いわゆる三面記事は一切報道されないそうである。

そうした実情を見聞きしていると、現在キューバはアメリカの経済封鎖によって苦しんでいるが、逆に経済封鎖があるからこそキューバの革命政権は成り立っているのではないか、という気がしてくる。アメリカの次の大統領選挙で政権が替われば、おそらく対キューバ政策は大きく緩和されるだろう。そのとき解き放たれた消費の欲望とアメリカ大量消費社会の圧倒的影響、そしてグローバルゼーションの大波に、革命キューバはひとたまりもなく飲み込まれてしまうのではないか。

今回の旅行に持参した本の1冊である大窪一志著『風はキューバから吹いてくる』(同時代社、1998年)の中で、彼は次のように論じている。カストロやゲバラは、革命キューバが貨幣物神崇拜を克服した「新しい人間」を生み出すことを夢見ていた。しかし現実に形成されたのは、マルクスが『経済学・哲学草稿』の中で批判した「私有財産の徹底した表現」としての「粗

野な共産主義」であった。この体制に一般の労働者・農民がついてきたのは何故か。「彼らが感銘したのは、この『新しい人間』を説くチェやフィデルたち指導者が、実際にまったく無私で高潔な人間であって、みずから説く理念を身をもって実行していたという点にしかなかった」(207ページ)のであって、決して「新しい人間」プロジェクトそのものに共感したからではない、と大窪は言うのである。私もまた、今回のキューバ訪問で同じ印象を受けざるを得なかった。

オルタナティブ社会への期待

大量消費社会が巻き起こす消費の欲望に、単に「平等」を対置するだけでは不十分である。そこに生まれるのは、消費へのルサンチマンを内包した「粗野な共産主義」でしかない。そうならないためには、おそらく、全く違う位相に立って土俵を設定する必要があるのだろう。個人的には、いまキューバにおいて育ちつつある環境立国の方向性をぜひ追求してもらいたい。また、協力社会・キューバならではの協同組合やNPOを活かした経済社会をつかっていてもらいたい。環境破壊の競争社会に生きる私たちとは、全く違う社会の可能性。吉田太郎著『200万都市が有機野菜で自給できるわけ 都市農業大国キューバ・リポート』(築地書館、2002年)は、現在のキューバに生まれつつあるそうした環境と市民活動の新しい芽をつなぎ合わせて、魅力的なオルタナティブ社会を描いて見せた好著である。現地に行ってみて、現実そのものはこの本ほどバラ色ではないという印象を受けたが(実際、ハバナ大学経済分析センターでは、石油がないから仕方なく有機農業をやっているの

あって一時しのぎに過ぎない、と冷めたことを言われ、かなりガックリきた)、ゲバラやカストロの革命に胸を躍らせたキューバ・ファンの私としては、革命キューバには、いつまでも輝いていてほしいのである。

アメリカに公然と反旗を翻すチャベスのベネズエラ、平和と自然を大切にする独自の国づくりを進めるコスタリカ、そして新

しい協力と環境の社会を模索するキューバ。現在の日本でも、格差や貧困の拡大の中で新自由主義を再検討する動きが強まっているが、そうした意味でいま中米は非常に面白いと思う。今回の旅行を契機にスペイン語も少し勉強して、キューバをはじめとする中南米に引き続き注目していきたい。



(写真はゲバラ像の前で新たな革命を誓う私。)